

た。翌日正午頃、師団司令部上空に B 29 が十二機編隊で来襲、猛烈な爆撃を受けたが、落とされた爆弾の割には被害軽微で、死傷二人、建物の被害二棟だけであったが、この日、師団司令部の建物を目標として行われた爆撃によって近在の現地人の村落が誤爆を受けて火災が発生したことが望見された。村落においては、死傷者が多発していることが予想されたので、師団司令部から救護班を派遣することになった。救護班長には私が任命された。救護班には、負傷者運搬用トラック二台（海軍部隊差し出し）の使用が許可された。私は、衛生兵二人、運転手二人を指揮して、所要の衛生材料・担架などをトラックに積み、目的の村落に急行した。

急行した村落の火災は既に消され

ていたが、予想どおり、百名近い重軽傷者が村落内に溢（あふ）れていた。私は、まず、重症者から応急手当を施した後、トラックまで運んだ。中には、爆弾の破片で腹部に受けた創（そう）から腸が飛び出している者もあった。スワバワ島は、空襲を受けたことがなかったため、誰一人として空襲に関する知識の持ち合わせがなかった。村落の長老の話によれば、この日、村落の人々は、B 29 に向かって打ち上げられている日本軍の高射砲弾が炸裂する様を、広場に集まって見物していたところ、目標を大きく逸れた爆弾が、近くに落ちたために大惨事となったと証言してくれた。

結局、我々救護班が病院までトラックで輸送した負傷者は七三名であった。トラックに乗せられた負傷者

が十名近く逃走したので、その理由を尋ねたところ、病院で治療費を請求されたら困るからと言うのが全ての人の理由であった。私は、病院長とは懇意の中であったので、病院に到着後、直ちに、病院長に、負傷者と共に、手術に必要な包帯・ガーゼ・縫合針・縫合糸等は無償であると説明して渡したところ、病院長は手術室の床に跪（ひざまず）いて衷心から感謝の意を表してくれた。救護班長の私は、無事、任務を果たし、所属長の軍医部高級部員・副官部及び参謀部の高級部員にも復命した。

最後に、この日の爆撃について、驚くべき特異な事項があったので、付記することにした。この日、B 29 から投下された爆弾のうち不発弾が一発あったので、翌日、不発弾処理